

崔書勉先生と私『近時の日韓関係を憂う―崔書勉先生への感謝を込めて―』

草原 克豪

私にとって韓国との最初の接点は崔書勉先生との出会いであった。今からちょうど二十年前の一九九七年八月、ある勉強会で先生が講師として来られたのである。それまでは韓国とはまったく縁がなく、韓国を訪れたこともなければ、韓国人と会ったこともなかった。だから私にとっては、韓国＝崔書勉先生である。実際、崔先生抜きに韓国は考えられないのである。

最初の出会いからまもなく、崔書勉先生のお世話で勉強会の仲間と週末を利用して初めて韓国の土を踏んだ。国会議事堂では金守漢国会議長の「日韓関係がよくならなければ、それは時代の要請に対する怠慢であり、歴史への背反である」という言葉に強い感銘を受けた。

拓殖大学創立百周年記念事業で学生海外派遣団を率いて韓国を訪問した際には、崔先生のお計らいで李東元先生が理事長をつとめる東元大学も訪問し、かつて外務長官として世論の反対をおしきって日韓基本条約を締結した李東元先生の教育者としての一面に触れることができ、改めて深い感動を覚えた。

帰国した日にはこれまた崔先生のお蔭で来日中の金鐘泌前國務總理主催の茶話会にお招きを受け、「日韓の友好親善のため今後とも命ある限り尽したい」との金先生の決意表明に心を打たれた。「学生を連れて韓国を訪問し、先ほど帰ってまいりました」と申し上げると、「この次は私に知らせてください」との言葉も頂いた。

折しも一九九八年の金大中大統領と小渕恵三首相との会談で「二十世紀に起こったことは二十世紀中に清算して、新しい決意で新しい世紀を迎える」との意思表明がなされ、それを契機に、サッカーワールドカップが日韓共催で開催されることになり、さらに天皇陛下が「桓武天皇の生母が百濟武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じ

ています」と述べて、日韓両国の交流が良い方向に向かうことを願う気持ちを示された時期でもあった。

その流れに掉さすように、日本政府は韓国人教員の日本招聘事業と日本人教員の韓国派遣事業を開始した。韓国側もこの事業を高く評価し、のちに韓国政府が日本人教員を招聘するようにもなった。私もその招聘を受けて日本人教員団の団長として韓国の学校を視察する機会に恵まれ、地道な人的交流の重要性を実感した一人である。

日韓談話室ではいつも崔書勉先生の明快で含蓄のある講話を通じて韓国を身近に感じることができたし、天皇陛下の早期訪韓への期待も高まっていた。談話室でお目にかかった朴権恵氏が大統領に就任したことも新しい時代の到来を予感させるものだった。誰もが日韓関係の未来に明るい展望が開けることを期待したのである。

だがその期待は裏切られ、希望は失望に変わった。朴権恵政権は国内の親北左翼勢力に牛耳られたのか反日的政策を展開し、後任の文在寅大統領は、国際約束もどく吹く風とばかりに国民情緒を優先してはばからず、北朝鮮の脅威を前にして右に左に揺れ動き、一向に立ち位置が定まらない。これが韓国の真の姿なのだろうか。

新渡戸稲造は今から百年も前に次に次に述べた。「朝鮮が強力かつ良く治まった真の独立国であるかぎり、それは緩衝国といえようけれど、その国があるいは中国の勢力下に、あるいはロシアの勢力下に揺れるとなると、極東には平和の保障はありえないし、日本にとって安全はない」。この視点に立つて彼は、朝鮮が強力で良く治まった真の独立国であれば日本が併合する必要もなかったと言う。

振り返ってみれば、日清戦争にしても日露戦争にしても、西欧列強のアジア進出が最終の局面を迎えたなかで、朝鮮半島の安定をめぐる日本、中国、ロシアの利害が衝突したために起きた戦争だった。そして、この地政学的な構図は百年以上経った今日においても基本的に変わっていないのだ。そのことを改めて思い起こさせられる昨今の国際情勢である。

それにしても、韓国の国内事情は私たち日本人には理解しにくいことが多い。私たちの目には見えないところで国論が複雑に分かれて、政府は右からも左からも信頼されていない。反日という一点においてのみ国論が一つにまとまるのだ。それにし

ても、なぜそれほどまでに反日感情が強いのだろうか。

確かに韓国は台湾と違って、長い歴史とすぐれた伝統文化をもつ国である。それだけに、自分の弟分とでもいうべき日本の統治下に置かれたことで、一層強い屈辱感を味わうことになったのであろう。そうした感情は日本人としてもある程度は理解できる。しかしそれが韓国文化の伝統である「恨」の感情に結びつくと、日本人の理解を超えてしまうのだ。

反日感情の背景には建国をめぐる歴史観の問題が絡んでいる。韓国の憲法前文は、一九一九年の三・一運動によって上海にできた大韓民国臨時政府を現在の韓国の前身と位置付けているのだ。自分たちは日本による統治を認めず、ずっと日本と戦い続けてきたのだと言いたいのであろうか。日本人にとってはびっくり仰天の歴史観である。

だがこの臨時政府なるものは国際的に承認されたものではないし、日本とは戦争もしていない。第二次世界大戦の参戦国としても認められず、サンフランシスコ講和条約への署名も認められなかった。現在の韓国が成立したのは国際法上はあくまでも一九四八年であって、憲法前文の規定は虚構あるいは幻想に過ぎない。

戦後になって朝鮮は日本の統治から解放されたが、それは自ら独立戦争を戦って勝ち取ったものではなかった。北はソ連、南はアメリカの占領下におかれ、南に大韓民国が成立すると北には朝鮮民主主義人民共和国が成立して内戦が勃発し、劣勢に追い込まれた大韓民国は米軍の支援でようやく解放されたのである。その結果、韓国人は自己のアイデンティティを確立することができず、それによって鬱積した不満や恨みが、筋違いではあるが、かつての統治者である日本にぶつけられることになったともいえる。

また韓国政府は、日韓基本条約によって両国間での問題は全て解決したにもかかわらず、国民に対しては条約に基づく十分な補償措置を講じてきたとはいえない。そのことが政府に対する不信感につながり、慰安婦問題や徴用工問題などの一因ともなっているのだ。さらにこれまで韓国政府が意図的に進めてきた反日教育の影響も無視するわけにはいかない。政府の教育を通じて国民の間に植え付けられた反日感情が、結果的に日韓関係改善に取り組む政府の足枷となっているのである。

日本は日本で、これまで過去の歴史の事実を学校できちんと教えてこなかったことを反省しなければならない。だがそれにして、現実を直視せずに過去にばかり目を向け、しかも歴史の事実を歪曲あるいは捏造までして、他者に責任を転嫁することで自己を正当化しようとする一部の韓国人の態度は、まるで駄々っ子のようだ。

日本側にも責任がある。戦後の日本人は、GHQの占領政策の下で、戦前の日本のしたことはすべて悪かったと教え込まれた。こうして贖罪意識を植え付けられた日本の知識人たちは、左翼的立場から日本の過去を批判し、韓国や中国の反日運動を助長する役割を果たしてきたのである。

今でも日本には、特定の国に対して現実を無視した幻想を抱き、日本だけが間違っているかのような物言いをする人が少なくない。それを論調にしているマスメディアも存在する。わざわざ外国にまで出かけて行って、日本の悪口を言いふらす政治家やジャーナリストも残念ながら後を絶たない。

しかし時代は変わりつつある。近年は歴史の検証が進んだ結果、過去の事実に対する理解が進み、韓国の主張には事実の歪曲や捏造が多く含まれていることが次々に明らかにされてきたのである。

それにもかかわらず繰り返される昨今の韓国の執拗な反日運動は、日本人の間にいたずらに韓国嫌いを生み出すばかりで、日韓関係の悪化を意図した悪質な行為としか言いようがない。もつと現実を直視し、時代の先を見通した冷静な対応をするよう韓国側に期待するのは、過大な望みなのであろうか。崔書勉先生もさぞかし心を痛めておられるだろうと思うと、残念でならない。

日本として重要なことは、相手の言い分には耳を傾けるが、理不尽な要求に対しては毅然と対処することだ。とはいえ、韓国人の示す感情的な反日的言動に対して、日本人までが同じレベルで感情的に対応したのでは問題の解決にはならない。反論すべきことは事実をもってきちんと論理的に反論しながら、あくまでも冷静かつ理性的な態度で、相手の心情をも思いやりながら、辛抱強く接していくしかない。それが隣国としての宿命である。

ところで、一方ではこのように日韓関係が悪化しているにもかかわらず、近年日本を訪れる韓国人観光客は相変わらず増え続けている。これをどう解釈したらよいのだろうか。その理由はともかくとして、少なくとも一般の韓国人が反日感情に凝り固まっているというわけではなさそうだ。だとすれば、こうした大衆レベルの接触が増えることによつて、両国間の相互理解が深まる可能性はありうるし、ぜひそういう方向にもっていかねければならないと思う。韓国政府にはこうした現実を直視して、未来志向で日韓関係の改善に取り組んでほしいと願わずにはいられない。

日本はもともと八百万の神の国であり、多神教の国である。「和を以て貴しとなす」国である。だから白か黒かのどちらか一つが正解で、それ以外は間違っているとは考えない。内部では様々な意見があろうとも、外部に対しては一つにまとまる。それが日本人の生活の智慧であった。そのためには忍耐と寛容の精神が必要であり、何よりも相手に敬意がなければならぬ。国と国の関係においても同じであろう。

日本は決して好戦的な国ではない。侵略的な行動をとつたのは二十世紀の前半の短い期間だけであり、それも西洋列強による膨張的な帝国主義に対抗しようとしたためであった。軍国主義が日本の本質ではないことは、戦後七十年間の歴史を見れば明らかである。





